

みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました主催6団体の一つであります原水爆禁止日本国民会議(原水禁)事務局長の谷です。本日は地元茨城からこれだけの多くのみなさんにお集まりいただきました。また、関東各地、東北からも、そして遠くは九州の佐賀からも今日参加をいただいております。ありがとうございます。

先ほど大泉さんから、JCOの臨界事故の悲惨さについては語っていただきました。この後の講演の中でも、事故についてはお話をいただくことになると思いますので、私からはこの間、福島第一原発事故を経験した日本が、再び原発推進政策に舵を切ったこと、その誤りを指摘して、ご挨拶とさせていただきます。

JCOの臨界事故、そこから一体私達は何を学び、そして何を訴えてきたのか。それから2011年の福島第一原発事故このことから、私達は何を学んできたかと言うと、やはり「想定外」という言葉ですべて流されてはいけない、済ませてはいけないということです。それまでの想定を上回る事態が起こったのであれば、その後の想定は更新されていくべきです。その更新がおざなりになったままで、いつの間にか世間全体での記憶が、まるで薄らいだように、また、もう事故がなかったかのごとく、再び原発を使おうとする政府の姿勢に対して、私達はこれまでの問題を忘れていないんだという声を上げていく必要があると認識しています。

そういった意味では、今日のようにみなさんにお集まりいただいている集会の一つひとつが、大変意味のあるものです。この後、デモ行進を一緒に歩いていただきます。広く社会に対して、私達はこの問題を決して忘れていないんだ、原子力は危険なのだということを訴えていくことは重要だというふうに考えています。

そして何より、JCO臨界事故を起こした側の責任、福島第一原発事故を起こした責任の所在はどこにあるのかということが、いまだ明確にはされていません。このことが原子力に関わる問題が解決しない大きな阻害要因になっていると考えます。責任の所在というのはいまだ曖昧なもので、想定外であったので責任を誰が取るかはわからないとなると、いつまでたってもまちがった原子力政策を止められない、誤りを正すことはできないのだと思います。

福島ではいまだ3万人を超えるみなさんが避難生活を強いられているにも関わらず、エネルギー不足だとか、脱炭素だとかを理由にして、原子力を再び活用しようとしています。

私たちは、生活を安定的にするために、誰かを犠牲にすることを望んでいるわけでは決してありません。誰かを危険に追いやってまで自分の生活を安全に過ごしたいと思うわけではありません。

大切なのは一人ひとりの命です。命に寄り添った政治が求められていますし、そのための政策が実現されるべきだということを、私たちはこれまでも強く訴えてきたところでもあります。

もう一つ、福島で「ALPS処理水」といわれる汚染水の海洋放出がはじまって1年が経過しました。科学的には安全だとか、薄めて流しているから問題ないだとか、政府・東電は主張していますが、私たちが問題だと言ってるのは、この先の未来にどうなるかわからない、わからないことが科学的であるはずではないということです。ですから、薄めて流せばいいのだとなってしまうと、今後いろんな理屈をつけて、さまざまなことが可能になってしまいます。そういう理屈を今、許してはなりません。そして何より、安全かどうか決めるのは、生活する私たち自身です。情報を正しく公開する責任が事業者にも国にもあるはずで、自分たちにとって都合のいい情報しか明らかにしていないのに安全ですとまで言い切ってしまう、そのことが大きな不信感を招き、結果として、臨界事故や福島第一原発の事故を引き起こしてきた事実があると、私は認識しています。

JCO臨界事故から25年経った今でも、この原発政策を止めきれずにいる現状を、みなさんとともに大変悔しい思いをしながら受け止めつつ、未来に向けて、決してこれを諦めるわけにはいかないと考えています。今やるべきことをして、しっかりと原発政策に反対の声を上げていきましょう。

そのことをお願いして、主催団体としての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。